高校生の自己効力感と自己肯定感に関する考察

～ 福岡県立Ａ高等学校を事例に ～

氏　　名　　田島　浩司

指導教員　　松田　　憲

内閣府が 5 年ごとに公開している「我が国と諸外国（アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、韓国、スウェーデン）の若者（満 10 歳～29 歳）の意識に関する調査」によると、日本の若者の自己効力感[1]は年を重ねるごとに急降下している。また同調査における自己肯定感[2]は他の 6 カ国と比較して圧倒的に低い水準にある。どうしてこのような事態に至ったのであろうか。また改善のための手立てはないものであろうか。

本研究は、こうした「問い」を立てたうえで福岡県立Ａ高等学校の 2 年生 177 名（男子 82 名・女子 95 名）を対象に自己効力感と自己肯定感の実態や性差による有意性を統計的に分析した。その結果、両者はゆるやかな正の相関関係にあり、自己効力感に男女の差は検出されなかったが、自己肯定感では「男子>女子」という有意性が確認された。

また周りの人々（友人・家族・先生）のかかわり度合が自己効力感・自己肯定感にどのような影響を与えるのかも検証した。「友人には積極的」な態度や良好な「家族とのふれあい」が両者に正の影響を与え、「友人との群れを回避」する傾向や「友人への配慮」は、わずかに負の影響を及ぼすことが示唆された。また「先生とのふれあい」や「先生への敬意」は、自己効力感にも自己肯定感にもほとんど影響を与えないことも観測された。

このように周りの人々との関係性が自己効力感・自己肯定感を大きく左右するという示唆を高校 2 年生の置かれた近年の環境変化（コロナウィルス感染拡大・スマホとＳＮＳ・“ブラック化”する教育現場）と関連づけて考察を加えた。

最後に、そこから見えて来る課題への提言として我が国の若者の自己効力感と自己肯定感を向上させるためのいくつかの方策を提示した。

キーワード：自己効力感（self-efficacy），自己肯定感（self-esteem），ギャング，チャム，ピア，Evidence-Based Policy Making（エビデンスに基づいた政策立案）

---

1 「自分なら出来るかも知れない」「自分なら最後までやり遂げられるだろう」などといった能力をもとにした可能性の認知のこと

2 能力の有無とは別に「自分はやれる」「自分はほかの誰にも負けない」などとありのままの自分を受入れる認知のこと